

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720267

研究課題名(和文) 植民地期朝鮮における文化運動の展開と植民地権力

研究課題名(英文) Cultural Movements under Colonial Korea

研究代表者

三ツ井 崇 (MITSUI TAKASHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：60425080

研究成果の概要(和文)：植民地期朝鮮において展開された文化運動の性格は、従来、日本の植民地支配に対する「抵抗」の論理として評価されてきたが、実際にはそのような「抵抗」の論理を体現しつつも、支配権力との関係は常に対抗的であるわけではなかった。「文明」への希求、政策への協力といった次元において、支配権力との間で緊張関係を強いられたのであった。本研究では、教育、言論、生活改善などの側面に注目しながら、この関係性について明らかにするほか、支配権力による朝鮮文化構築への介入の実態について調査した。

研究成果の概要(英文)：The character of cultural movements under colonial Korea is often evaluated that they resisted against Japan's colonial rule. In fact, those movements, however, not always resisted against Japan. In this research, I paid an attention to education, journalism, better living etc. and understood strained relations between Korean intellectual and Korean Government General(KGG). I also took notice of Korean culture structuring by KGG.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：東洋史

科研費の分科・細目：東アジア史

キーワード：朝鮮、文化、言論、植民地支配、教育、ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

研究開始以前より植民地期朝鮮における言語政策・運動の展開とその性格という問題を主たる研究関心としてきた。具体的には、植民地期の朝鮮知識人による朝鮮語規範化運動(=ハングル運動)の性格が旧来的な「支配-抵抗」の二分法的解釈のなかにとどまるものでなく、朝鮮総督府の言語政策、とりわけ朝鮮語規範化政策に対する対応のなかで、

一定の「協力」関係でもって展開された面もあったことを実証した。もちろん、この「協力」は、朝鮮知識人による政策への完全な「順応」を意味するのではなく、「民族」の「再興」・「更生」ひいては「自治」や「独立」を目的とする民族運動のツールとして存在したものであり、その意味において政策側と運動側の相互に異なる思惑を背景として成立した関係であった。また、そのような理解は、ハングル運動の担い手の多様性という事実

を前提にはじめて可能であることを繰り返し主張してきた。このような考えは、政策と運動の関係を一律に対抗関係のなかでのみ捉えようとする（主に社会言語学分野での）言語政策史ないしは知識社会学的研究では不十分であった。

上記の問題意識に沿って筆者が執筆した論文が以下のものである（博士学位論文は省略した）。

- ・「朝鮮総督府『諺文綴字法』の歴史的意味—審議過程の分析を通して—」『一橋研究』第25巻第1号、2000年
- ・「植民地期の朝鮮語問題をどう考えるかについての一試論—朝鮮総督府『諺文綴字法』を事例として—」『植民地教育史研究年報』第3号、2000年
- ・「『ハングル』に敗れた朝鮮語綴字法—朴勝彬と朝鮮語学研究会をめぐる二、三のこと—」『ことばと社会』（三元社）第6号、2002年
- ・「朝鮮語学会の朝鮮語規範化運動と朝鮮語学会事件」『東アジア研究』（大阪経済法科大学東アジア研究所）第35号、2002年
- ・「植民地下 朝鮮에서의 言語支配：朝鮮語 規範化問題 中心으로 (植民地下朝鮮における言語支配—朝鮮語規範化問題を中心に—)」『韓日民族問題研究』第4号、2003年
- ・「植民地期朝鮮における言語運動の展開と性格—1920～30年代を中心に—」『歴史学研究』No.802、2005年

さて、後年、これらの研究で示した歴史像に対する反応は日本での研究よりは、韓国の文学研究者たちによるハングル運動史研究において強く見られるようになった。とりわけ民族主義的歴史像に対する批判として出てきた潮流のなかで論じられることになる。その代表的論者として金哲、李恵鈴が挙げられるが、これらの研究者たちは、旧来の抵抗史観を批判／非難する文脈で、ハングル運動団体が総督府の朝鮮語規範化政策に「協力」したという事実を強調する。しかし、これらの研究では、民族主義批判がメインとなるあまり、植民地期における支配権力の作用についての議論は後退してしまうという問題を抱えた。このような研究動向と問題意識を受け、筆者がこれまでおこなってきた研究をさらに深化すべくさらなる資料の発掘を続け、言説分析ではなく、政策史および運動史の観点から実証し、かつ動態的に把握することの必要性を繰り返し主張してきた。

ここで、筆者は運動と政策との絡み合いという側面に重点を置くことにし、これまでの研究成果を踏まえながら、対象を言論および文化運動全般に広げることにした。次に、近年おもに韓国で盛んになっている言論史研

究の成果（鄭晋錫、鄭根埴、韓基亨ら）を受け、近代朝鮮社会で、言論の拡大、民族啓蒙運動の展開、識字問題の推移そして前近代的秩序を有する儒林社会において文字が果たした役割と文字に対する価値意識の変化・交錯などについて、それぞれ支配権力の介入という論点を加味させて社会史的に論じた。ここでも、とりわけ植民地期において「支配—被支配」の関係性のもとでさまざまな価値観が交錯し、朝鮮人社会内部でも文字文化に対する価値意識は分かれていたのであった。そして支配権力はそれぞれの価値意識に対応しながら、朝鮮社会へと介入していったのであった。

文化運動史全般に視野を広げると、近年、とりわけ韓国において盛んなのは、メディア・言論史研究であり、その担い手は新聞学、文学、社会学の研究者たちである。しかし、これらの研究は、知識人の言説空間、言論監視機構・制度の実態について明らかにするものの、朝鮮知識人が言論を通じて、何を目的として運動を展開し、そのために支配権力とどのような関係を結ぶことになったのかという運動そのものの性格にまで立ち入ったものではない。Michael Robinson が言うとおり、支配者側が朝鮮人の「文化的自治 (cultural autonomy) の場を認めることは、日本による文化的同化 (cultural assimilation) という最終的な目的を支えるようにも、転覆させるようにも作用した」 (“Broadcasting, Cultural Hegemony, and Colonial Modernity, 1924-1945” in Gi-Wook Shin and Michael Robinson(eds.), *Colonial Modernity in Korea*, Harvard University Press, Cambridge and London, 1999) とするならば、分析の鍵は、文化運動の実態とそれに対する植民地権力の対応という点にある。本研究では文化運動のなかでも教育、文学、学術、生活改善関係の運動に注目し、その展開過程と性格について解明する。また、運動の過程に対する総督府権力の監視と弾圧のプロセスを同時に見ることで、運動の担い手と統治者側の双方のリアリティがどのようなものであり、どのような緊張関係をもって存在／展開していたのかに迫ることもまた重要であることを認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究は植民地期朝鮮の文化運動、なかでも教育、文学、学術、生活改善関係の運動の展開過程と性格について解明する。具体的には、運動の過程に対する総督府権力の監視と弾圧のプロセスを同時に見ながら、運動の担い手と統治者側の双方のリアリティがどのようなものであり、どのような緊張関係をもって存在／展開していたのかに迫るところ

に大きな関心がある。

もっとも、「朝鮮文化」の構築は、朝鮮総督府もまた文化支配の文脈で「朝鮮文化」の構築を目指したのであった。一方でそのような動きに朝鮮人側（民衆、儒林層、近代知識人）が呼応して、彼ら／彼女ら独自の文脈で「朝鮮文化」を構築しようとする動きが出現したことも近年明らかにされており、支配権力の側の介入は監視や弾圧という方法だけではなかった。とりわけ文明化のイデオロギーに関しては支配者側／被支配者側ともに共有するところであり、ときに後者が前者の政策を補完しさえしたのであった。よって総督府側の「積極的な」文化政策の歴史的意味について考察することも本研究のもう一つの重要課題となる。要約すれば、「近代」をめぐる価値と利害、「支配—被支配」の政治的関係の交錯のなかで、「朝鮮文化」の構築はいかに展開したのかについて実証し、植民地権力と被支配者側の作用／反作用、文化構築の担い手の複数性と多方向性について確認することが最終的な目的である。

3. 研究の方法

研究方法は文献・史料収集と分析が中心となったが、収集文献・史料の性格、分析の方向性については、おおむね以下のとおりである。

- (1) 従来の教育史研究、言語政策史・運動史研究の成果を踏まえ、朝鮮人側の文明化への希求と統治者側による統治政策への動員の過程を明らかにする。
- (2) 従来の言論史研究の成果を整理・検討し、各種文字メディアを通じた文化運動の展開過程を跡付け、その性格について理解する。
- (3) 官民双方で出された新聞資料、言論統制関係資料、その他治安関係資料を収集し、文化運動（教育、文学、学術、生活改善など）の社会的影響と統治者側の対応について検討する。
- (4) 朝鮮総督府によって推進された「朝鮮文化」にかかわる政策について、従来の研究動向を把握、整理したあと、朝鮮人社会への影響ないしはそれとの作用関係について分析する。
- (5) 近年、関連研究が韓国の文学研究者たちによって担われていることに鑑み、これらの研究を参照しつつ、批判的に検証したうえで、文学テキストを資料として用いることの可能性について追究する。また、その研究の多くが、現代のナショナリズム批判を意識したもので、ときに韓国国内における歴史認識問題とも結びついているので、研究領域を超えた参照の可能性とともに、現代の言説空間

の問題もあわせて見据えることにする。

4. 研究成果

以下、4つに分けて研究成果について論じる。

(1) 韓国における文化史研究の性格

文化運動史を含む文化史研究は、近年、韓国において盛んになされている。また、これらの研究の多くが文学史研究（近代文学の成立）との関連でなされていることが大きな特徴と言える。現代の「民族主義（nationalism）」に対する批判を土台に、これまで支配的であった「国民史／民族史（national history）」を脱構築することを大きな目的としている。文学研究の観点から、言論・検閲・出版文化、言語社会論、学問史などの領域を扱う研究が非常に増えている。その他、音楽、美術、その他大衆文化論に関する研究もなされ、資料集が刊行されるなどの動きも見せている。これらの研究もやはり、近代朝鮮の文化史を「国民化」の次元にとらわれない形で見直そうとするものである。いずれも、文化の発信者と受容者、そしてそれを成立させる社会経済・政治的基盤と一体のものとしてとらえようとする新しい動きであることは間違いない。よって、従来のように「国民」形成や植民地支配に対する「抵抗」へと意味を一元化するような一部の歴史研究の動向に対して、批判的な姿勢をとるものが多くあらわれたということである。

これらの研究で注目すべき点は、「民族主義」の相対化と「抵抗」に一元化されない意義付けの2点である。まず、後者についてみれば、先述の colonial modernity の考え方も通じ、近代性を通じた大衆の形成と体制への動員という視点が明確に打ち出されている点であろう。この点は、植民地支配を論じる点でも重要な視点である。

ところで、この論点を打ち出すことは、従前の「国民史／民族史」批判＝「民族主義」批判を意味するものであった。前者の論点がまさにそうである。しかし、近年の文化史研究のなかには、後者の論点が、「民族主義」批判のために暴露主義的に論じられる側面が少なくなく、後者の論点を必ずしも深められているとはいえない面がある。同様に、大衆の動員の一形態である（抵抗に対する）「協力」の側面を、歴史的脈絡を無視して取り上げる嫌いもあり、後者の論点が十分に歴史化されていない研究も多いことがわかる。また、言説分析や社会史に比重が置かれるものの、従来の制度史・政治史の脈絡との接合がなされていないなど課題も多い。文化史研究の全般的動向について調査した結果、以上のような課題を認識するにいたった。「3. 研究の

方法」の(5)にかかわる成果である。

(2) 言語・教育・言論の問題からみた植民地文化支配の構造

以上のような研究動向を踏まえ、今回言語・言論・教育の問題を中心に据え、以下のような成果を挙げた。

朝鮮総督府の朝鮮語政策と朝鮮知識人の言語運動の関係を整理するなかで、日本語(文化)と朝鮮語(文化)の間の序列=威信(prestige)の差に注目した。そして、支配一被支配の大きな文脈では、この両言語間の二層的序列が存在したと言えるが、当時の出版文化、検閲の動向、知識人の朝鮮文化観などを総合したとき、ミクロな領域においては、両言語間の威信は必ずしも固定的なものではなかった。むしろ、大きな文脈における日本語の威信の大きさをもたらしたのは、日本語出版物の大量の流入であるが、それは逆の問題も引き起こし得た。教育政策上は、日本語の習得が「国民化」の重要な契機とされていたが、それは日本語が「国民精神」を体現しているという前提のもとに成り立つのであった。しかし、実際には当局側にとって危険な思想(社会主義など)もまた日本語を媒介として入るのであった。検閲の存在意義は、まさに「国民化」に寄与しないものを取り除くところにあったのであり、それは日本語出版物であっても同様であった。

つまり、朝鮮語政策/運動の位置づけを考える際に、日本語=日本人、朝鮮語=朝鮮人という枠組みを無批判に前提としてはいけないことがわかった。

さて、文化運動を支配政策から距離を置いた存在として固定的にとらえる見方がこれまでは主流であったが、いろいろな意味で政策との関係を緊密に保っていたことが明らかにされていた。言語運動とその担い手に注目して、この点について明らかにした。一つは、言語(・文化)政策遂行の円滑化のために、総督府が言語運動家たちを動員した事例がみられるということである。一方、言語運動家たちも、支配者側の論理を利用して、自らの運動を有利に進めようとする面があったことも同時に明らかになった。

もう一つは、総督府支配下の教育政策の遂行のなかで、朝鮮語教員は朝鮮人が担ったが、文化運動が活発化する1920年代以前においても、こうした朝鮮人教員が総督府の朝鮮語政策に公然と意見を述べる場が存在したことも重要である。このことは、1920年代以降に文化運動が活発に展開される土台となったことも明らかになった。このとき注目した場とは、総督府の教育所管官庁である学務局の発行する雑誌群であり、これらも言論史の観点から分析していく必要がある。以上は、「3. 研究の方法」の(1)(2)に関わる成

果である。

(3) 教育・生活改善の問題からみた植民地文化支配の構造

朝鮮総督府の朝鮮語科教材として、朝鮮在来の民話が採用されたことの意味に注目し、その時代性とイデオロギーとの関係について考察した。

考察対象としたのは「三年峠」という民話である。これが、1930年代初頭に刊行された『普通学校朝鮮語読本』、『四年制普通学校朝鮮語読本』の教材として採用されたのである。「三年峠」で転べば三年しか生きられないという伝説を信じる老人が、実際に転んでしまったところ、近所の少年が機転を利かせて、一回転べば三年生きられる、と発想を転換させ、老人を助けるという主題である。しかし、総督府の教科書では、この老人を朝鮮人の「未開性」を表象するものとし、「迷信打破」の教訓談として位置づけた。

これには、1930年代初頭という時代が大きな意味を持つ。つまり、農村振興運動下における生活改善イデオロギー=近代主義を反映したものであった。教育という場がまさにそのイデオロギーを朝鮮人に内面化させるものとして機能したわけだが、そのメカニズムを具体的に探るべく、ある朝鮮人教員の教材指導案の記述に注目した。それを見ると、総督府側が意図したイデオロギーをそのまま受け入れ、教えることを推奨していたのである。その朝鮮人教員が民族主義的な言語運動の担い手でもあったことから、文化運動における近代主義の受容と、近代主義に基づく文化支配あるいは動員といった問題が前景化することを明らかにした。以上は、「3. 研究の方法」の(3)にかかわる研究成果である。

(4) 学問史—朝鮮史学史の観点から—

総督府による「朝鮮文化」の構築の問題を、日本の近代学問が朝鮮に及ぼした影響という観点から探ることを意図している。この点については、おもに文献収集をおこない、今後分析していく予定である。なお、朝鮮植民地化以前の明治期日本における近代の歴史学の成立と朝鮮観の形成について、日本の「国民史」形成の過程で、朝鮮の位置づけが「国史(日本史)」と「東洋史」の間であいまいにならざるを得なかったことを明らかにした。また、植民地期朝鮮の史学史に対する研究が日本であまり成熟していない現状に鑑み、1950~60年代の日本における朝鮮史学史のあり方について批判的に検討した。以上の基礎的な作業を踏まえ、今後、より実証的に植民地期朝鮮の学問史について明らかにしていきたい。以上は、「3. 研究の方法」の(4)にかかわる成果である。

以上から、文化運動の展開とその背景、そして支配権力との関係（利用／介入・動員）について具体相を確認し、近年の文化史研究で必ずしも十分ではない、文化問題の歴史化を試みたことを本研究課題の成果として挙げることができる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 三ツ井崇、解放後南朝鮮／韓国における言語運動・政策と「言語運動史」—植民地期との「連続」に注目して—、歴史学研究、査読無、第875号、2011、13—24.
- ② 三ツ井崇、「言語問題」からみた朝鮮近代史—教育政策と言語運動の側面から—、韓国史研究（仁荷大学校韓国学研究所）、査読有、第22輯、2010、441—477.
- ③ 三ツ井崇、没主体的「東洋」像の形成—近代日本の東洋史学の形成と「言語」「地理」言説—、朝鮮半島のことばと社会—油谷幸利先生還暦記念論文集—、明石書店、査読無、2009、649—678.
- ④ 三ツ井崇、「言語問題」からみた朝鮮近代史—教育政策と言語運動の側面から—、中国21（愛知大学現代中国学会）、査読無、vol.31、2009、285—306.
- ⑤ 三ツ井崇、朝鮮総督府「諺文綴字法」の歴史的意味・再論、年報朝鮮學（九州大學朝鮮學研究會）、査読無、第12号、2009、51—79.

〔学会発表〕（計6件）

- ① 三ツ井崇、植民地期普通学校朝鮮語科教育の性格—民話「三年峠」を通してみる植民地言語支配—（朝鮮語）、延世大学校国語国文学科BK21事業団海外碩学招請講演会、延世大学校（大韓民国）、2011年3月21日.
- ② 三ツ井崇、近代朝鮮言語運動史、どうみるべきか?—言語運動と政策、そして権力の観点から—（朝鮮語）、第1回 人文言語学国際フォーラム、東京外国語大学、2011年2月19日.
- ③ 三ツ井崇、近年の日本における朝鮮近代史研究の動向—植民地期を中心に—、大阪歴史科学協議会9月例会、大阪・梅田東学習ルーム、2010年9月18日.
- ④ 三ツ井崇、戦後日本における韓国（史）学の始まりと「史学史」像—1950年代を中心に—（朝鮮語）、韓国史研究会 強制併合100年学術大会、国立中央博物館（大韓民国）、2010年8月28日.
- ⑤ 三ツ井崇、解放後南朝鮮／韓国の言語運動および政策と「言語運動史」—植民地期と

の「連続」に注目して—（朝鮮語）、成均館大学校東アジア学術院人文韓国（HK）定例学術会議、成均館大学校（大韓民国）、2010年8月6日.

- ⑥ 三ツ井崇、「言語問題」からみた朝鮮近代史—教育政策と言語運動の側面から—（朝鮮語）、2009年度仁荷大学校文科大学人文科学研究所招請学術セミナー、仁荷大学校（大韓民国）、2009年10月29日.

〔図書〕（計3件）

- ① 糟谷憲一、須川英徳、並木真人、三ツ井崇ほか31名、朝鮮史研究入門、名古屋大学出版会、2011、220—223・266—276・415—417・428—437.
- ② 板垣竜太、鄭智泳、岩崎稔、三ツ井崇ほか10名、東アジアの記憶の場、河出書房新社、2011、144—165.
- ③ 三ツ井崇、朝鮮植民地支配と言語、明石書店、2010、404

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三ツ井 崇 (MITSUI TAKASHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：60425080

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：